



伊東忠太

Chuta Ito

「造家」は即物的すぎるとして、アーキテクチュールの本義を説き「建築」に名称を変えた。

同時に法隆寺をギリシャと対比して論じ、日本初の建築史家誕生を知らしめた。

その一方、社寺から近代的な建築、そして怪奇でユーモラスな動物群に至るまで、

多岐にわたるデザインをこなす設計者でもあった。

学士院会員であり芸術院会員、そして建築界で初の文化勲章受賞者。

多彩な顔を持つ伊東忠太とは…。

挑戦の建築家

倉方俊輔

SHUNSUKE KURAKATA

くらかた・しゅんすけ—建築史家・明星大学 非常勤講師／1971年生まれ。1999年、早稲田大学大学院博士課程修了。博士（工学）。主な著書：『伊東忠太を知っていますか』鈴木博之編著（共著、王国社 2003）、『吉阪隆正とル・コルビュジエ』（王国社 2005）、『吉阪隆正の迷宮』（共著、TOTO出版 2005）、『住宅70年代・狂い咲き』（共著、エクスナレッジ 2006）など。

【*1】前号の平井ゆかの論考を参照（平井ゆか「生涯“新しい建築”をつくり続けた建築家 曾禰達蔵」INAX REPORT No.167、2006年7月、p.6）

【*2】伊東忠太「忠太自画像上」（日本建築学会建築博物館蔵、p.48）

【*3】伊東忠太「法隆寺建築論」（『建築雑誌』第83号、1893年11月）。この初稿の他、改稿として発表し、未完に終わった「法隆寺建築論」（『考古学会雑誌』第1巻第1〜8号、1896年12月〜97年7月）と、学位請求論文（『東京帝国大学紀要』第1冊第1号、1898年3月）がある【*4】帝国博物館編纂『日本帝国美術略史稿』（農商務省、1901年）において、各時代ごとの建築部分を執筆。1908年に増補・再刊された『稿本日本帝国美術略史』（日本美術社）では「建築之部」として独立した章にまとめられている

【*5】伊東忠太「アーキテクチュール」の本義を論じて其譯字を撰定し我が造家學會の改名を望む」（『建築雑誌』第90号、1894年6月）

【*6】伊東忠太「建築進化の原則より見たる我邦建築の前途」（『建築雑誌』第265号、1909年1月）。前年11月30日の学会講演を掲載したもの【*7】木子清敬との共同設計

【*8】伊東は1914年4月6日に神社奉祀調査会委員に任命された。次いで、1915年4月に実際の造営に当たる明治神宮造営局が設置されると、参与と工営課長として工事計画の策定と統括に当たった

「歴史家になりたかった」という曾禰達蔵【*1】とは逆に、誰よりも建築家なのに歴史家になってしまった人間、それが伊東忠太である。

夏目漱石やフランク・ロイド・ライトと同じ慶応3年（1867）に生まれた伊東は、5歳の頃、生地の山形県米沢から東京に移り、番町小学校、東京外国語学校、第一高等学校と、確立しつつあった学歴エリートのコースを歩んだ。小さい頃から絵が得意で美術家になりたかったが、「男児たるものが国家のためにつくす事を考えずに美術家になろうとはふがない」という父の意見に反論できず【*2】、工学系を専攻。中でも芸術に関係がありそうだということで、帝国大学工科大学造家学科（現・東京大学工学部建築学科）に進学する。

明治25年（1892）に大学を卒業して、大学院に進み、翌年「法隆寺建築論」【*3】を発表する。法隆寺の価値を世界的な視点から説いたこの論文が、伊東の歴史家としての立場を鮮明にした。内務省古社寺保存会委員として全国をまわって文化財保護の動きを先導し、初の日本建築通史として『日本帝国美術略史稿』（1901）【*4】を著す。東京帝国大学、東京美術学校（現・東京芸術大学）、早稲田大学などで「日本建築史」を講義し、アジア・欧米留学（1902〜05）から戻った後は「東洋建築史」の第一人者にもなる。帝国学士院会員（1925）と帝国芸術院会員（1938）を兼ね、昭和18年（1943）には建築界で初めて文化勲章の栄誉にも輝いた。建築の歴史研究でご飯を食べた最初の人、建築史家の元祖として日本近代建築史に刻まれている。

理論家としても知られる。『「アーキテクチュール」の本義を論じて其譯字を撰定し我が造家學會の改名を望む』（1894）【*5】は「造家学会」から「建築学会」（現・日本建築学会）へ改名する契機となった。「建築進化の原則より見たる我邦建築の前途」（1909）【*6】は日本の将来の建築が「進化主義」に基づくべきだと説いた論で、明治思想の一典型として今でもしばしば論じられる。

もちろん、建築家として、その名を知る人も多いだろう。「平安神宮」（1895）【*7】や「明治神宮」（1920）【*8】を始め多数の神社造営にかかわった。それだけでなく、「可睡斎護国塔」（1911）、「真宗信徒生命保険会社」（1912）、「日泰寺仏舎利奉安塔」（1918）といった仏教関係の建物の設計も手掛けた。京都・東山にそびえる「祇園閣」（1927）の奇妙な姿や、「兼松講堂」（1927）のホールを飾る妖怪の装飾が思い出されるかもしれない。外観をロマネスク風にまとめた三角屋根の「兼松講堂」は、震災後につくられた東京商科大学（現・一橋大学）新キャンパスのデザインコードを決定し、文教都市・国立の象徴と

して親しまれている。

そんなふうに伊東の名前は割に有名だが、では、総合してどんな人物だったかということ、いまだにはっきり答えられていない。一国史観の権化になったり、アジア主義の先駆けになったり、伝統の擁護者になったり、近代主義者になったりと、その位置づけは論者によってまちまちである。設計作品が19世紀の歴史主義建築の枠内にとどまっているにせよ、個人の妄想のはげ口であるにせよ、他にない作風の個性がどこにあるかが考えられたことはない。設計と歴史あるいは理論との折り合いの付け方も明らかにされていない。没後50年を過ぎても、伊東の歴史家と理論家と建築家は分裂していて、彼の挑戦の意味は霞の中にあった。

伊東が建築の世界で何を試みたのか。それに迫る一番の手掛かりは、やはり生き続けている建築作品であるはずだ。



大倉集古館

「大倉集古館」は実業家・大倉喜八郎の邸宅内につくられた私的な美術館を発祥とする。関東大震災で大きな被害を受け、昭和2年（1927）に現在の建物が伊東の設計で建てられた。

鉄筋コンクリート2階建ての建物は、内外ともに中国風のデザインで覆われている。展示ケースや長椅子などの備品類も伊東の手によるもので、曲線の使い方や、各地の様式の織り交ぜ方が彼らしい。隣接した別館は戦後のホテルオークラ建設によって取り壊されたが、本館はホテルのシンボルとして丁寧な保存と改修がなされ、当初のデザインが守られている。

美術館であるにもかかわらず、個性的な装飾がしっくりしているのは、それが東洋美術を中心とした収集品と合っているからだろう。「大倉集古館」の倉庫に、紫禁城の着色図面が残されている。伊東の初めての海外出張である紫禁城調査（1901）の成果として作成されたものだ【*9】。大倉は中国大陸への進出に積極的であり、東洋美術に対する嗜好を持っていた。こうした資料を仲立ちに、2人は建物の形を話し合ったのだろう【*10】。

創設者・収藏品・建築が一体になった「大倉集古館」の雰囲気は、個人のコレクションから発生した美術館の存在を実感させてくれる。それは東洋に覇を伸ばした実業家の夢と、それを受け止め、自らの思いを重ね合わせて造形する建築家の技量なしには成立しなかった。中国風のデザインは、かえって戦前日本の文化と思想の一脈を象徴している。



阪急ビル内部装飾

「阪急ビル内部装飾」（1929）では、大衆の夢を形にしようとした。紫禁城調査から戻った伊東は「支那建築研究の必要に就て」（1902）【*11】という文章を著し、中国建築を研究しなければならない理由の1つとして、今後、日本で不燃材料による椅子式の建築をつくる上で、そのデザインが大いに参考になることを挙げている。昭和8年（1933）に完成した大阪・梅田の阪急ビルの内部装飾は、入口に面した2層吹抜けの広間を「公衆の眼を惹くに足る壮麗なもの」にしてほしいという阪急側の希望に応えたものだ【*12】。半円形の東壁に急行のスピードを表す青龍と白馬、西壁には社の冠たる地位を象徴する獅子と鳳凰をデザインしている。

中国風の図案だが、それだけではない。図像はモザイクタイルでつくられ、天井には金色の唐草文様が舞う。ヴォールト状の空間にはビザンティン建築のイメージが投影され、ユーラシア大陸をつなぐ装飾モチーフが駆使されている。ビザンティン、イスラム、ロマネスク、沖縄、中国東北部。伊東は生涯、文明の中心に位置づけられるものより、周辺や過渡期と見なされるような様式を好み、その価値を発見していった。そんな彼の横断的な手法で、乗降客が行き交う公共空間が彩られている。「民都」大阪の玄関口だからこそ説得力のある形である【*13】。

1960年代のニューヨークで、ローマ建築をモチーフとした壮麗なペンシルヴァニア駅が都市再開発で取り壊され、それに対する後悔は様式主義建築の再評価を推し進めた。現在、阪急ビルを高層ビルに建て替える計画が進行している。内部装飾の部材も取り外され



兼松講堂 一橋大学が国立に移って最初に完成した。中世ヨーロッパの様式を採用して内外に多くの妖怪を用い、インドや中国の図像と折衷している。隣接する本館や図書館などは文部省建築課の設計。伊東の手が入っていないことは、妖怪の険しい表情からも明らか



阪急ビル内部装飾 阪急の梅田駅と百貨店を複合した建物の入口ホール装飾を担当した。当時話題を呼んだ最新式のビルだったが、モダンな外観と裏腹に歴史的様式をミックスした意匠を展開している

【*9】奥村恒三郎の手による紫禁城の着色図面【*10】大倉喜八郎「戴春閣建築瑣談」（『建築工芸叢誌』第1期第6冊、明治45年7月）に、「戴春閣」（設計：今村吉之助）の新築にあたって、片山東熊、妻木頼賢、伊東忠太に相談したとあり、伊東との建築的な関係は、遅くとも明治末には始まったことが分かる。その後、「大倉喜八郎邸門」（1916）、「大倉喜八郎小田原別邸」（1919）、「大倉葬儀場」（1924）の設計が伊東に依頼されたが、いずれも不実施に終わった

【*11】伊東忠太「支那建築研究の必要に就て」（『実業界』第2号、1902年2月）

【*12】伊東忠太「阪急ビルの内部装飾に就て」（『建築と社会』第15巻第2号、1932年2月）

【*13】阪急梅田ビルとターミナルが『「私鉄王国」大阪の象徴』であり、『「阪急文化園」の完成』として築かれた経緯は、原武史「「民都」大阪対「帝都」東京」（講談社、1998年）を参照



震災記念堂内部 見え掛かりは飛鳥様式や禅宗様だが、平断面は明らかにバシリカ式。施設の公共的性格に由来しているのだろう。ただし、設計にあたって「純日本式」にすることが要請されたため、キリスト教の教会堂との関係に伊東は口を閉ざしている



上—照明器具 妖怪が威厳な公共施設のさまざまな場所に潜む。これは入口上部のカーゴイル風の妖怪。法隆寺式の人字型束を食い破って、球形の照明を手に入れている
下—納骨堂入口 右ページ写真の背面の塔は納骨堂。小鬼が入口両脇の灯籠を支えている。上部の火燈曲線にイスラム風アーチのニュアンスが重ねられている。複数の様式を架け渡すような、伊東が好んで用いたデザイン要素の1つ

【*14】伊東のオリジナル図面は見つかっていないが、正面左手の講堂内部はインドやペルシャの様式を応用したデザインであり、本堂内部の初期の構想について想像を巡らすことができる

て、保管されていると聞く。私鉄王国の雄は、自らの過去にどのような決断を下すのだろうか。

震災記念堂（現・東京都慰霊堂）

世界各地の様式を組み合わせ、今までにない建築を創造する。そんな内なる課題を最も実行できたのは、昭和5年（1930）に完成した東京・両国の「震災記念堂」だろう。

「建築進化の原則より見たる我邦建築の前途」で伊東は、将来の日本建築は日本を本位としながら、諸外国の様式も採り入れて進化させていけばよいと述べている。そして、「日本趣味」は、イスラム建築や中国建築の中にも含まれているのだともいう。伊東は新たな日本建築を、近代日本の建築家の立場から組み立てていこうとした。それは、法隆寺の中にギリシアを発見した「法隆寺建築論」の延長上にある。彼がその生涯の中でギリシアを崇拜したことはないし、近世以前の日本建築を手放しに称賛した文章も見られない。西洋が一番ならば日本の建築家は垂流にすぎないし、近世以前の建物に魅了されるだけならば、近代に生まれた自分たち建築家はみな消えればよいことになる。伊東はそんな当たり前を初めて真剣に考えた。

「震災記念堂」は一つひとつの様式の特徴を残しながら、各部が組み合わせられ、新たな生命力を持った全体になっている。ちょうど入口に取り付いている妖怪のように。共に1つの手法であり、才能が必要な、個性的な創造行為ではないか。「震災記念堂」を一度でも訪れてしまうと、彼の建築を表面的な意匠のパッチワークだとはみなせない。

築地本願寺

昭和9年（1934）に完成した「築地本願寺」は、伊東の代表作とされる。確かに最大規模の実作である。実現までの背景も深い。戦前日本の文化と思想の一脈を象徴する人物といえば、西本願寺22世宗主の大谷光瑞もその一人だ。伊東はアジア・欧米留学の最中に偶然、大谷光瑞が派遣した探検隊の一員と出会い、大谷との関係が生まれる。明治末に依頼された建築は、1勝3敗に終わる。実現したのは「真宗信徒生命保険会社」だけで、「西本願寺大連別院」（1907）、「西本願寺鎮西別院」（1911）、「西本願寺香港布教所」（1912）は設計が終了していたにもかかわらずお蔵入りになった。それから25年後のリターンマッチが「築地本願寺」である。

折衷の創造性はここにも横溢している。だが、内部については、伊東の意見が檀家の反対にあい、従来通りの和風でつくられた【*14】。「築地本願寺」は、伊東と大谷の挑戦と挫折の記念碑として、今もそびえている。

おわりに

伊東忠太の建築は「近代」という時代の挑戦と乱暴を体現しているのではないかと。様式主義という西洋の武器を逆にとり、各地の様式を個人的に折衷させることによって西洋中心主義の相対化を試み、返す刀で「伝統」の解釈を近代人の特権にした。日本の近代の建築家に何が出来るかを初めて明示的に考えた人間といえる。理論と創造を共に試みて、今の建築家の始まりにいる。

理論を考える時、先人がいなかったら歴史に手を出した。それが時代の要請に適合したことで、伊東は歴史家になってしまった。建築史家の祖にノミネートされてしまうと、そうした立場からしか見ることができなくなってしまう。そんな先入観を解きほぐしてくれるものは、生き続けている建築をおいて他にない。

「生き続ける」とはどういうことだろう。それは標本のように固定化されるのではなく、使い続けられ、新たな意味が生まれるということに他ならない。意義が定まっていないからこそ壊されるということと表裏一体であって、だからこそ、残される必要がある。建築と建築家が発見されるのに、半世紀や一世紀は決して長い時間ではないだろう。*

（図版解説も筆者）

震災記念堂

【建築概要】

所在地：東京都墨田区横綱2-3-6 横綱町公園内

規模：地上1階、塔屋4階

構造：SRC造

竣工年：1930年

東面外観 関東大震災の犠牲者を追悼する施設として1930年に完成した。正面から見ると大きな唐破風を持つ和風だが、背面に接続する塔は中国風で、内部の構成はバシリカ式。伊東特有の折衷的手法が発揮されている



大倉集古館

[建築概要]

所在地：東京都港区虎ノ門2-10-3

規模：地上2階

構造：RC造

竣工年：1927年



左ページ—屋根降り棟 1927年に完成し、今もホテルオークラの伝統を象徴する建物として用いられている。東洋美術の収集品に合わせた中国風のデザイン。屋根の物（ふん）が棟を吐き、張り詰めた曲線を大空に描く
 上—東面外観 石積み風のアーチをくぐって内部に入る。2階にはバルコニーが突き出て、かつては隣接する大倉喜八郎の大邸宅を一望できた。高欄や天井といった細部に至るまで、伊東の実体験を基にきめ細かなデザインがなされている（1989年撮影）

下—正面全景 戦前は前からジグザグと回廊が延びて玄関部につながり、途中に強く反った屋根の六角堂があった
 下左—木製椅子 背板に石材を組み合わせている。備品類も伊東がトータルにデザインした。これもその1つ。バルコニーにあって、誰でも腰掛けられる
 下右—2階展示室 柱の上部にインド由来の海の怪物であるマカラがいる。少し分かりづらいが、天井には龍が隠れている。改修はオリジナルのデザインを尊重して、現代の機能に合わせている



■ 築地本願寺

[建築概要]

所在地：東京都中央区築地3-15-1

規模：地下1階、地上2階

構造：SRC造、RC造

竣工年：1934年

正面外観 関東地方を統括する西本願寺（浄土真宗本願寺派）の築地別院である。かつての木造伽藍が関東大震災で焼失したことを受けて、鉄骨鉄筋コンクリート造で1934年に完成した。当時最新の技術を駆使した新様式の複合施設で、中央に本堂、向かって左側に大会議室や法主の居室、右側に事務関係の各室が収められている。また、全体の構成は西洋建築の性格が強い。1階を切石張仕上げの堅牢な意匠として基準階を2階に置き、入口と本堂の間に教会堂のような中間室を設けている

左ページ下段左から—本堂内部 鉄筋コンクリートの躯体の中に木材を組み、本願寺の和風を踏襲している。伊東らしさは見られない。関東大震災直後の新聞記事や「干渉がましい注文などがいろいろ出された」という伊東の回想などから、工事を請け負った松井組に一任されたと判断するのが適当だろう

中央屋根 インドのアジャンター石窟寺院などにあるチャイティア窓をモチーフにしている。建物の両端にはストゥーパ状の鐘楼が載る。柱頭の形や多角形からなる柱身、欄干（らんじゅん）に似た内部階段の手すりなど、インド建築の要素を幅広く採り入れている。右の写真は、同側面

下段左から—動物彫刻 さまざまな動物彫刻が潜んでいることでも知られる築地本願寺。身を隠して辺りをうかがっているような猿は、入口から1階の休憩室に降りる階段の途中にいる

きよんとした表情の鳥。単純化された全体形とくっついた曲線が特徴的で、伊東のオリジナルスケッチが色濃く反映されたものと見てよいだろう

階段の親柱に載る象。仏教説話に縁の深い動物である。本堂裏口の車寄せにも2頭の象が並んで、鼻を上げて梁を支えている様子を見ることができる

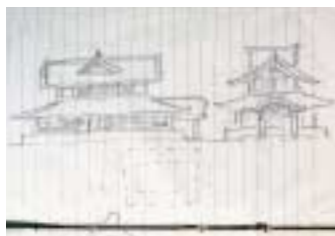
入口の柱と一体化した獅子。太い足でぐっと大地をつかみ、背には翼を生やす。アジア・欧米留学の履中、中東で目にした造形に触発されたに違いない

階段の下に座る獅子。伊東は狛犬のデザインも多く手掛けていて、滑稽な特徴が共通している。例えば、靖国神社の南側にある狛犬（1933）もその1つ





1



2



3



4

- 1 フィールドノート表紙 記録魔の伊東が持ち歩いた手帳。写真の横長型のものを中心に74冊が現存する
- 2 神宮徴古館のエスキース (1897) アジア・欧米留学前には数少ない建築創作の試み。和風デザインだが、バシリカ式教会堂のように高窓を設けることを検討している
- 3 北京でのスケッチ (1902) 伊東の興味の範囲は幅広く、留学中には身の回りのさまざまなものを巧みな筆致で描いている
- 4 ランプのデザイン (1902) 北京で観察したばかりのラマ塔を早速アレンジしたもの。得意とする和風美人と、大好きな猫も一緒だ
- 5 山西地方への旅行を終えた時の戯画 (1902) 訪れた行程をひも状に描く。天女は伊東自身であり、留学中の手帳のあちこちに現れる

- 6 客船内の装飾 (1904) 勃興しつつあったアールヌーヴォーにも遭遇した。ボンベイからトリエステに向かうイタリア船内でのスケッチ。その歴史的な意味を思考している
- 7 カーリエ・ジャーミィの装飾 (1904) 3ヵ月間滞在したイスタンブールでの観察。豊かな曲線と色彩を写し取りながら、洋の東西を超えた建築の在りようを探った
- 8 ニューヨークの高層ビル群 (1905) 無表情のビル群が作り出す新たな風景にも出会う。彼方に手を差し伸べる股旅姿の男は何を思うのか
- 9 建築細部案 (1927頃) 日本建築の懸魚や笄形(おいがた)が動物化されている。生涯の手帳の総枚数は10,000ページを超え、尽きせぬ読解の可能性を秘めている



10



- 10 「怪奇図案集」 妖怪を多数収録して、建築では満たされない創造力を封じ込めている。過去に取材した妖怪そのままではなく、新たにつくり出した形であること、おどろおどろしさより愛嬌が優っていることなど、伊東の個性が強い。こうした創作妖怪が確立するのも、アジア・欧米留学からの帰国後で、建築創作と平行した手法の形成がうかがえる



卒業設計 (1892) 細やかな装飾で覆われたゴシック様式の大聖堂。辰野金吾が「九十五点を与えた」という

伊東忠太 人と作品

1867-1954

略歴

- 1867年(慶応3) 米沢藩座頭町(山形県米沢)に生まれる
- 1889年(明22) 帝国大学工科大学造家学科入学。同郷学生と米沢有為会を設立
- 1892年(明25) 帝国大学工科大学造家学科卒業。大学院に進学
- 1893年(明26) 「法隆寺建築論」を発表。平安神宮の技師となり京都に赴任
- 1894年(明27) 『「アーキテクチュール」の本義を論じて其譯字を撰定し我が造家學會の改名を望む』を発表し、造家学会(現・日本建築学会)の改称を主張
- 1896年(明29) 内務省古社寺保存会委員
- 1897年(明30) 帝国大学講師
- 1898年(明31) 造神宮技師兼内務技師
- 1899年(明32) 東京帝国大学助教授
- 1901年(明34) 工学博士。『日本帝国美術略史稿』建築の部を執筆。紫禁城調査のため北京に出張
- 1902年(明35) アジア・欧米留学に出発。中国、インド、トルコ、エジプト、ギリシア、ヨーロッパ各国、アメリカ合衆国などを訪問し、1905年に帰国
- 1905年(明38) 東京帝国大学教授
- 1908年(明41) 講演「建築進化の原則より見たる我邦建築の前途」において「建築進化主義」を主張
- 1911年(明44) 早稲田大学講師を併任
- 1912年(明45) カンボジア、中国に出張
- 1924年(大13) 沖縄建築を調査し、首里城正殿を特別保護建造物に指定(後に国宝)
- 1925年(大14) 帝国学士院会員
- 1928年(昭3) 東京帝国大学名誉教授。早稲田大学教授
- 1929年(昭4) 国宝保存会委員。東京工業大学講師
- 1931年(昭6) 東京帝室博物館(現・東京国立博物館)設計競技審査委員
- 1937年(昭12) 日独文化交流教授としてドイツに出張
- 1938年(昭13) 帝国芸術院会員
- 1943年(昭18) 文化勲章。日泰文化会館設計競技審査委員長
- 1954年(昭29) 逝去(86歳)

主な作品

※印は計画のみ

- 1895年(明28) 平安神宮(京都)(木子清敬と共同設計)
- 1897年(明30) 神宮徴古館(三重)*
- 1898年(明31) 豊国廟(京都)
- 1901年(明34) 台湾神宮(台湾)(武田五一と共同で基本設計)
- 1903年(明34) 伊勢神宮司庁(三重)(駒杵勤治と共同設計)
- 1906年(明39) 大連太子堂(大連)*
- 1907年(明40) 宮崎神宮および徴古館(宮崎)(佐々木岩次郎と共同設計)、西本願寺大連別院(大連)*
- 1908年(明41) 南部利祥像台座(岩手)
- 1909年(明42) 浅野総一郎邸(東京)、山県有朋別邸(神奈川)
- 1910年(明43) 樺太神社(ユジノ・サハリンスク)(基本設計)、三会寺釈王殿(神奈川)*
- 1911年(明44) 可睡斎護国塔(静岡)、西村捨三像台座(大阪)、西本願寺鎮西別院(福岡)*
- 1912年(明45) 真宗信徒生命保険会社(京都)、東京大学正門(東京)、興禅寺伽藍再建(長野)(遠藤於菟と共同設計)、西本願寺香港布教所(香港)(鶴飼長三郎と共同設計)*
- 1913年(大2) 中牟田家墓(東京)

- 1914年(大3) 不忍弁天堂天龍門(東京)、東京大正博覧会華表(東京)
- 1915年(大4) 順徳天皇遺址碑(新潟)
- 1916年(大5) 前島密像台座(東京)、弥彦神社(新潟)、大倉喜八郎邸門(東京)*
- 1917年(大6) 楠妣庵(大阪)、岐阜公園五重塔(岐阜)(一部のみ実施)
- 1918年(大7) 日泰寺仏舎利奉安塔(愛知)
- 1919年(大8) 武田恭作家安骨塔(東京)(遠藤於菟と共同設計)、大倉喜八郎小田原別邸(神奈川)*(別案の顧問)
- 1920年(大9) 明治神宮(東京)、久米民之助箱根別邸 門・石灯籠・仁王門(神奈川)、池田謙斎墓(東京)
- 1921年(大10) 有栖川宮威仁親王像台座(東京)、平田東助像台座(東京)、元寇殲滅碑(福岡)、松岬神社(山形)、順徳天皇遺跡社殿(新潟)、渡辺渡墓(東京)、青山胤通墓石灯籠(東京)、浅草区駒形町神輿(東京)
- 1923年(大12) 上杉神社(山形)、総持寺聖観音像台座(神奈川)、笠間稲荷文庫(茨城)、市川邸内明治天皇行在所遺址碑(新潟)
- 1924年(大13) 上野大仏 石段・石階(東京)*、シャム王宮内 宮室・庭園(バンコク)*、大倉葬儀場(東京)*
- 1925年(大14) 田中新七家墓(神奈川)、朝鮮神宮(ソウル)(顧問)、桜園石灯籠(ワシントン)*
- 1926年(大15) 白石元治郎家墓(神奈川)、平田東助墓(東京)、桃山御陵 軍人勅諭の碑(京都)、御木本五重塔(フィラデルフィア万博に出品)、北京図書館・研究所(内田祥三と共同設計)*
- 1927年(昭2) 兼松講堂(東京)、大倉集古館(東京)、祇園閣(京都)、大倉喜八郎京都別邸(京都)、入澤達吉邸(東京)、小磯家墓(兵庫)、松平直政公像台座(島根)、東天竺山世尊寺 釈迦堂(愛知)*
- 1928年(昭3) 明治節記念塔(京都)*
- 1929年(昭4) 阪急ビル内部装飾(大阪)、東天竺山世尊寺厨子(愛知)
- 1930年(昭5) 震災記念堂(東京)、大倉喜八郎墓(東京)、志賀重昂墓(愛知)
- 1931年(昭6) 中山法華経寺聖教殿(千葉)、東京都復興記念館(東京)(佐野利器と共同設計)
- 1932年(昭7) 浅野総一郎夫妻墓(神奈川)
- 1933年(昭8) 靖国神社狛犬(東京)、春畝山博文寺之碑(ソウル)、佐嘉神社献灯(佐賀)、大倉集古館三層閣及廊(東京)*
- 1934年(昭9) 築地本願寺(東京)、浅野家墓相輪(神奈川)、大雄山最乗寺 真殿・本堂等(神奈川)、中橋徳五郎墓所(東京)、壽多有博士碑(静岡)(佐藤功一と共同設計)
- 1935(昭10) 明善寺本堂(山形)、靖国神社 大燈籠(東京)、明治神宮 参道大燈籠(東京)、白石元治郎熱海別荘(静岡)、湯島聖堂(東京)(顧問)、可睡斎護国塔前 礼堂・山門(静岡)*
- 1936(昭11) 今泉嘉一郎像台座(群馬)、片倉兼太郎碑(長野)、藤田政輔墓(東京)
- 1937(昭12) 善光寺毘沙門堂(新潟)、総持寺大僧堂(神奈川)
- 1938(昭13) 鮎川義介家墓(東京)、ベルリン日本大使館庭園(ベルリン)*
- 1939(昭14) 入澤達吉墓(東京)、関野貞碑(新潟)
- 1940(昭15) 伊東家墓(神奈川)、女子教育発祥碑(東京)*
- 1942(昭17) 佐藤功一墓(東京)、入澤家祖先墓堂(長野)、延暦寺内 供養塔(滋賀)*、真如法親王顕彰碑(シンガポール)*



壮年期の伊東忠太

取材協力・資料・写真提供

財団法人大倉文化財団・大倉集古館／社団法人日本建築学会建築博物館(p.4、p.12、p.14)／浄土真宗本願寺派本願寺築地別院／東京大学工学部建築学科(p.13、表-4)／東京都立横網町公園／増田彰久写真事務所(p.5下2点) (50音順)

【次号予告】

次号(2007年1月20日発行)の「生き続ける建築」は武田五一です。

*特に明記のない写真は、2006年8、9月に新規撮影したものです。